

凧良ゆう氏の小説「流浪の月」にみる

性腺機能低下症の主人公の告白から

私が治療を続けているカルマン症候群の患者さんから「先生是非ともこの本は読んでください。私と同じ患者さんのことが書かれています。」と紹介された。さっそく凧良ゆう氏の「**流浪の月**」に目を通してみた。少女誘拐を疑われて逮捕された主人公、佐伯文がかつての自分を振り返り、高校生になっても自身の二次性徴が発来しないことに悩む姿を専門の医師も驚く程リアルに描写している。まずその文章をここの紹介しておく。さすがに受賞作家の文章だけあって、主人公の心理描写のすばらしさに圧倒された。凧良氏に敬意を表してその一部を引用させていただくことにした。

「流浪の月」 第4章 314-317、創元文芸文庫

「高校生になり、うっすら体毛が生えたときには安堵した。声も低くなった気がする。けれどそこ止まりだ。高校三年にもなると、もう自分をごまかす手立てがなくなった。中性的な容貌がうける風潮もあり、学校でおかしな目で見られることはなかったが、裸体をさらせば自分がおかしいことはあきらかにわかる。……………

……………

自分の身体に一体なにがおきているのか。図書館で本を読みあさり、インターネットも調べ尽くし、最も近い症状の病気が見つかった。第二次性徴が来ない。声変わりせず、体毛も薄い。瘦身、高身長、手足が長く、子供のまま未発達な性

器。確証はない。病状に幅があり、この病気で顕著である症状が自分にはない。
だからちがうかもしれない。

期待、不安、期待、不安。ふたつを繰り返しながら、着替えや風呂で迂闊に自分の身体を目に入れてしまった瞬間、耐え難い屈辱と羞恥に心をにぎりつぶされた。絶えず揺らされることで沈んでいく地盤のように、ゆっくりと深い場所へと落ちていく。

家族での旅行、体育の着替え、人前で肌をさらすときは常に緊張を強いられた。誰にも相談できず、一人で病院へ行っては引き返すことを繰り返した。ぼくは本当にあの病気なのだろうか。それとも別の病気なのか。検査をすればすぐわかる。そのためには裸体をさらさなくてはいけない。それは羞恥を超えた、もはや恐怖だった。・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・

大人になりかけている同級生の女子は、僕には脅威でしかない。彼女たちのふくらんだ胸や、リップで薄く色のついた唇や、小首をかしげる仕草。友人たちが目を奪われるものすべてに、ぼくだけが目を伏せる。日々女性になっていく彼女たちを見ていると、未発達な身体への劣等感が浮き彫りにされるようだった。・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

大学生ともなると恋人がいることはもはや普通であり、地元では子供ができて結婚した友人までいる。恋愛、結婚、子供。多くの人に乗るレールから、ぼくは

外れ続けている。もうルールに戻れる気はしない。この先も、どこまで外れ続けていくのだろう。」

私は患者さんからの訴えや経験談を総合して性腺機能低下症の患者さんの成長期における辛い思いを想像してきた。著者自身若いころ、恋もし、結婚して子ども持つ、いわゆる普通の男性として仕事を続けている。この本に出合って性腺機能低下症を持つ男性の苦悩を私自身どれ程分かっていたと言えるか反省させられた。本書は少女誘拐の疑いを掛けられた主人公と少女との美しい世界が、世間からは犯罪行為とみなされる、かつてのフランス映画セルジュ・ブルギニヨンの「シベールの日曜日」を彷彿とさせる内容であり、一読に値する書である。最近映画化された。